JAPANESE JOURNAL OF INFLAMMATION
EDITORIAL*The 3rd International Congress of Inflammation*
*Makoto Katori**

第3回国際炎症学会 “Inflammation '97”

——日本開催に期して——

鹿 取 信*

日本炎症学会発足時よりいつかは日本で国際炎症学会を開催したいものだという希望をみんながもっていたが、やがてその時期が訪れようとしている。

IAIS (International Associations of Inflammation Societies) のウィーンにおける第1回国際炎症学会、本年英国の Brighton で行われる第2回国際炎症学会 (Inflammation '95) に引きつづいて第3回国際炎症学会 (Inflammation '97) は、1997年10月26～31日に東京の京王プラザホテルで水島裕会長のもとで開かれることが IAIS の Executive Committee で正式に決定された。

日本で国際学会を開くことはたんに名誉であるだけでなく、日本の炎症研究の実力を海外の研究者に印象づけられること、若い研究者が海外に行かなくても海外の著名な研究者にじかに接し、かつその研究内容や討論に刺激され、さらに、その討論に加わることが出来ることにある。英語圏で行われる国際会議と異なり、英語の得意でない日本人にとっても安心して Japanese English で話すこともできる。この意味で日本で国際会議を開く意義は大きい。

一方、host としての役割はきわめて重要である。言うまでもなく、国際炎症学会を開催するに当たってもっとも中心的なことは、いかに scientific level を最高に保ち、参加者に学問的に満足して帰ってもらうかである。ウィーンにおける第1回国際炎症学会はきわめて高い学問的レベルを示したし、本年の英国の第2回国際炎症学会もきつとすばらしいものになるだろうと期待されるだけに、われわれの責任は重い。molecular biology や gene technology の急速な発達、応用科学としての炎症研究を飛躍的に発展せしめた。各分野の年ごとの研究成果を見渡し、理解するだけで膨大なエネルギーを要し、個人がカバーしうる範囲は限られている。幸いなことに日本炎症学会の会員のなかに、また日本の研究者のなかに多くのすぐれた研究者が多数おられることはこの意味できわめて心強い。このなかで視野の広い若手研究者を理事のかたからご推薦いただきプログラム委員会を構成した。及ばずながら私はこの委員長と

* Department of Pharmacology, Kitasato University, School of Medicine
北里大学医学部薬理学教室

してご奉仕させていただくことになった。みなさまのご支援、ご援助と多くの建設的なご意見をぜひお願いしたい。

幸いに日本炎症学会は世界に類のないいくつかの特徴を揃えている。たとえば欧州の炎症学会はいずれも大学基礎研究者と製薬企業の研究者からなり、参加者はせいぜい100人ぐらいである。また、米国の炎症学会は主として製薬企業の研究者からなり、大学の研究者は会員としてほとんど参加していない。しかし、もちろん米国の基礎研究者の層は世界一広いので、その意味でトップレベルの特別講演やシンポジストを動員できる強みがある。これに対し日本炎症学会の会員数約2,400名、年会参加者数1,800名は世界に類のない大きな規模である。その特徴とするところは、薬理学にとどまらず、生化学、病理学、免疫学、微生物学、さらに合成化学など広い分野の基礎研究者、製薬企業の研究者が参加し、そのうえ研究に熱心な多くの臨床医学研究者の会員を擁しており、年会に参加していることにある。また、米国では別個に活動している結合組織の研究者が、日本では炎症学会では重要な構成メンバーであることも心強い。これを反映して毎年の日本炎症学会の年会のプログラムの内容は、年会長とそのプログラム委員会のご努力で、きわめて興味のある、up-dateなタイトルとなっている。

こうした背景のうえに、1997年までに日本の研究者が急速に発達していく世界の研究内容にどれだけ迫り、さらに独創的な研究分野をどれだけ開拓していけるかが問われているのであろう。

炎症反応の研究は、滲出性炎症反応のメディエーターの研究から、サイトカインの役割、さらに成長因子、肉芽形成といった増殖性炎症の生化学的解析へと発展しつつある。特に血管新生機序は内皮細胞の研究からも、また、成長因子の側からも今後きわめて興味のあるテーマとなろう。

新しいシクロオキシゲナーゼ(COX)-2は血管新生時に誘導され、ことによると成長因子の作用はプロスタグランジン E_2 にすべて帰せられるかもしれないからである。これと関係し metalloproteinases の役割など結合組織の生化学研究はますます盛んになるであろう。COX-2が血管新生に関係するとすれば、固形癌の転移はもちろんのこと、月ごとの子宮内膜の脱落后に起こる粘膜増殖はまさに COX-2 の関与するところとなり、選択的 COX-2 阻害薬開発の新しい目標が設定されてくる。せっかく世界の先端を切った日本の選択的 COX-2 阻害薬も Monsanto, Merck-Frosst など世界各社が競って新しい化合物を開発した。日本の製薬企業の一層の努力を期待し、日本で開催される Inflammation '97 には胸をはって新しい阻害薬の発表をしたいものである。

アンギオテンシンIIが AT_2 受容体を介して動脈壁肥厚を抑制することは、肉芽形成の機序とその制御に問題を投げかけるかもしれない。

この2～3年につぎつぎと発表される研究内容をいかに早く吸収し、われわれの国際炎症学会のプログラムに反映していくかがプログラム委員会に課せられた重い任務であろう。すでに各国の著名なかたがたが International Advisory Board Members に加わってくださり、プログラム内容についてのご意見をいただいたかたもある。

Inflammation '97 を成功させるために国内からみなさまがたの率直なご意見やご提言をぜひお寄せいただけるようお願いする次第である。

(日本炎症学会国際担当理事)